

複数のGFSI スキームへの対応



今から約20年前に世界食品安全イニシアチブ (GFSI) がベルギー法の下で設立されたとき、業界の重要な関係者を一つにまとめ、農場からメーカーまで適用される食品安全規格のグローバルなベンチマークを設定するというそのミッションに大きな賞賛が集まりました。

それ以来GFSIの傘下で、特定の国、地域、市場のセクター向けの多くの新たな食品安全スキームが誕生し、その結果、世界の食卓は以前よりも安全になりました。

大手の多国籍企業であれば、これに関連するコストをビジネス上のコストとして無視することもできますが、しかしサプライヤーになろうとする中小企業では、割くことのできるリソースはそれほど多くありません。

GFSIが認定したスキームは、最も厳格な食品安全要件を定めたスキームとして認められており、リコールのコストが製品や販売機会の損失よりも大きくなるブランド重視型の多国籍小売企業にとって、魅力的なものとなっています。

GFSI傘下の多くのスキームが、グローバルな基準への確実な適合に力を入れる一方で、国や地域の食品規制当局のコンプライアンス要件に適合するように具体的に設計されており、そのため、アプローチや監査での要求事項の違いが生じています。

GFSI 認定スキームには主に次のようなものがあります。

- BRCGS (British Retail Consortium) ¹
- IFS (International Food Standard) ²
- FSSC (Food Safety System Certification) ³
- SQF (Safe Quality Food) ⁴

複数のGFSIスキームに対応しようとするれば複雑な課題に直面することになり、そして、小売会社1社だけに供給を行うとしても、コンプライアンスに関する要求事項は多くの場合シンプルにはなりません。例えば、ドイツの小売会社がサプライヤーに対し、英国でのBRCGS認証の取得に加えてドイツやイタリアでのIFS認証の取得を要望する場合があります。

多くの食品会社が、特にEUのような共通する貿易圏内においては、単一の食品規格への適合だけで済むことを希望します。しかし、小売業者や規制当局が定める当該国の食品安全要件では、それに対応していないことが少なくありません。

十分なリソースを持つ企業では、複数の認証を達成し継続するための財務面と人材面でのコストは、対処できる範囲に収まるでしょう。一方、海外展開を希望する中小企業にとっては、資本やロジスティクスの面で困難が生じます。多くの企業にとってこのことは、ビジネスを行うために支払うべきコストと言えます。

GFSIでは、明らかに商業上の理由から、「審査の重複を減らす」ことを要求として掲げていますが、スキームオーナーたちは一般的に、複数スキームへの適合のコストを減らすことになる共通点よりも、独自のセールスポイントを強調します。

GFSI自体は認定または認証活動を行っていないため、活動の重複とその結果クライアントが支払うコストを最小限に抑えられるように複数のスキームに対して審査を行う方法を見つけ出す責任は、認証機関にあります。

これに関連した機会も存在します。例えば、BRCGSが要求する食品安全システムは、その70~80%がIFSと同じです。そしてどちらも同じ原則に基づいており、いずれも生産プロセスに関する規格の設定に重点を置いているため、スキームオーナーは、効率性が得られることを理解しています。

 認証を取得し維持するには、コストがかかります。十分な予算があるか確かめることが不可欠です。

そのため、LRQAのような専門的な知識と経験を有し、クライアントにフォーカスする認証機関(CB)は、個別のスキームの固有の要件を同時に満たす統合型の審査を提供することができます。

認証機関が複数の規格の資格を有する審査員1名を用意できるのであれば、審査員が行うべきことは、例えば購買マネージャーとの1度の面談か、あるいは生産エリアと機器、製品、工程の1度の審査だけです。または複数の審査員が必要とされる場合は、両方の審査員が居合わせてシニアエグゼクティブをインタビューすることも可能です。

しかしBRCGSとIFSのように、同じ原則に基づく規格間でも、統合審査のコスト面やリソース面での効率を低下させざる要求事項の違いが数多く残っています。

考え方が類似している規格でも、多くの違いが存在します。BRCGSは、より規範的な傾向があり、具体的で必須の要求事項が詳細に列挙されています。一方IFSは、企業には関連する脅威の評価と対処のためのハザード分析などのリスクベースのツールを用いる責任があると定めています。

こうした違いがあるため、生産者そして審査員が、大幅に異なる食品安全アプローチをとることが必要になります。食品サプライチェーンへの金属などの異物や汚染物質の混入を防ぐためのアプローチはその一例です。

もう一つ違いが見られる領域は、シニアマネジメントに関する要求事項です。BRCGSはシニアマネジメントに対し、自社の食品安全文化に関する責任を負うことを義務付けており、そのために内部告発方針、ならびに交差汚染や病原体が存在するリスクを最小限に抑えるためのコントロールが機能していることを確かめる環境モニタリングプログラムといったツールを利用することを要求しています。こうした点について、IFSでは現時点で具体的な規定はありません。

審査員の視点では、IFSとBRCGSでは、特定の製品や技術に対する能力面での要件が異なることがあります。すなわち、統合審査を行う審査員が、きわめて固有の一連の資格を必要とする(例えば低温殺菌と、生鮮食

品の保存期間を安全に伸ばすガス置換包装の「両方」の資格を求められる)可能性もあるのです。

原則と重点領域が共通する規格同士であっても、統合審査により複数のGFSI認証規格に対応しようとする企業にとっては難しい課題が生じることは明らかです。そして、審査の時間とコストを増やすことなく統合審査に別のGFSI規格を追加できる方法は存在しないのが実情です。

複数の資格を持つ経験豊富な審査員であれば、効率的なやり方をより巧みにつけられるかもしれませんが、それも、規格間に互換性があることが第一条件となります。IFSとBRCGSでは、審査面での効率を得られる領域もあると思われませんが、FSSCをここに加えた場合、審査の観点ではIFSとBRCGSとの共通点がきわめて少ないため、困難さがさらに強まることとなります。

GFSIでは現在、傘下にある規格中に共通の要素を増やすための作業が進展中です。それでもなお、限られたリソースしかない中小の食品生産者や製造業者にとっては、類似点よりも相違点の方が多いと思われることがあるでしょう。しかしすべてのスキームに共通する点が一つあります。それは、食品サプライチェーンを、実践者そして消費者にとってさらに安全なものにしようとする確固たる姿勢です。

- 1 <https://www.foodchainid.com/certification/brc-food-safety-certification/>
- 2 <https://www.ifs-certification.com/index.php/en/ifs>
- 3 <https://www.fssc22000.com/>
- 4 <https://www.sqfi.com/?lang=ja-jp>



Remco Pieters
フードテクニカルマネージャー | LRQA



LRQA

YOUR FUTURE. OUR FOCUS.

LRQAについて

認証、ブランド認証、食品安全、サイバーセキュリティ、インスペクション、教育研修分野の比類なき専門知識を結集することにより、当社は世界的な認証のリーディングプロバイダーの地位を確保しています。

その伝統は誇るべきものですが、顧客との今後のパートナー関係を構築する上で、本当に重要なのは現在の当社の姿です。揺るぎない価値、リスク管理・軽減における数十年の経験、未来への的確なフォーカスを組み合わせることで、より安心・安全・持続可能なビジネス構築に向けてお客様をいつでも支援します。

独立した審査・認証・教育研修から、技術アドバイザリーサービス、リアルタイムの認証技術、データによるサプライチェーン改革まで。当社の革新的なエンドツーエンドのソリューションが、変化の速いリスク環境に積極的に対処できるようお客様をサポートします。つまり、未来の状況を成り行きに任せるのではなく、お客様が自ら構築できるようになるのです。

お問い合わせ

Email : japan-tech@lr.org

URL : <https://www.lrqa.com/jp>



LRQAリミテッド

〒220-6010

横浜市西区みなとみらい2-3-1

クイーンズタワーA10階

本書に示すすべての情報が正確かつ最新であるように、LRQAでは細心の注意を払っています。ただし、情報の不正確さや変更について、当社は一切の責任を負いません。

Care is taken to ensure that all information provided is accurate and up to date; however, LRQA accepts no responsibility for inaccuracies in or changes to information.

For more information on LRQA, click here (<https://www.lrqa.com/entities>)

© LRQA Group Limited 2021